

リフト導入の成否事例を評価・分析

ジェー・シー・アイの和泉友紀

さんは、自身が担当する移動用リフトの提案事例5件から、利用者・家族の満足度、導入後の在宅介護継続期間、多職種連携の状況などについて評価・分析を行った。5件中、導入に至ったのは3件だった。「リフトを利用する意義について本人や家族が理解しているか、リフトに対する不安感や操作性の課題の有無が導入の成否を分けるポイントだった」と説明した。

リフト導入後、施設入所までお

よそ3年間の在宅介護を継続できた利用者の家族からは、「リフトがなければ、もっと早く施設入所を検討せざるを得なかった」とリフトを高く評価する声が寄せられた。

別の利用者では、ケアマネジャーやリハビリ専門職らと連携し、段階的にリフト導入へ繋がった。まずはシャワーキャリーとヘルパー2人体制で、自宅で入浴できるイメージを利用者・家族に掴んでもらった上で、移乗時の転倒リスクや本人・ヘルパーの負担軽減

ができる」と説明し、リフト導入に至った。利用者・家族の不安を払しょくするために、日頃の信頼関係を築いているケアマネなどとの多職種連携は「非常に効果的だった」と和泉さん。「個々のケースに合わせ、柔軟にリフトを提案・活用することで、利用者の重度化予防や在宅生活の継続に繋がりを、人材不足を補うことに繋がるのではないか。リフトを含め、福祉用具の持つ力を最大限引き出せるようにスキルアップに励みたい」と述べた。